夢の先、空の向こうに新しい林業の形があった

森林が県土の4分の3、古くから「木の国」と呼ばれスギやヒノキなどの優良産地としても知られる和歌山。紀州材は年輪が緻密で強度があり、さらに色つやも良く美しいと高く評価されている。今この木の国で、ICTを導入した木材生産の効率化・省力化、スマート林業が推進されている。

「和歌山の山林は急傾斜が多く、従来は15キロ程の資材を人が背負い、片道1時間の道を何往復もしていました。その肉体的負担は非常に大きく、怪我をすることもしばしば。働く人の林業離れも当然のような状況でした。しかし当社が開発したドローン〝いたきそ〟は、3分程で荷上げを行うことができ、社員の肉体的負担の軽減はもちろん、事故の減少、そして労働時間の圧倒的な短縮に成功しました」と語るのは、育林業を行うベンチャー企業、株式会社中川の創業者である中川雅也さんだ。「林業は〝きつい・汚い・危険・給料が安い〟という4K環境のうえ、田辺市においても重要な産業でありながら、子供達にその大切さは教えられていませんでした。また多くの山で木々が伐採されたままで植林されず、山はどんどん衰退しているような状況。林業とは数十年先にようやく利益が生まれるビジネスですから継続は大変です。山に木を植えたとしてもスギやヒノキばかりで、どんぐりなどの実を付ける広葉樹は植えられません。すると山に住む野生動物は食べ物がなく里に降りてきて、獣害として駆除されます。それってなんだか悲しい話ですよね。〝きれいごと〟といわれてもいい。緑が生い茂り、野生動物が楽しそうに暮らしている山を子供達に残したい。そういう思いから、できることは全部やり尽くそうと思いました。そして女性も活躍できる職場環境をつくるためにも〝いたきそ〟を開発し、社員のライフスタイルにあった就労時間のためにフレックス制を導入するなど、林業の働き方を徹底的に変えました」。

森林には土砂崩れや洪水・渇水を防止し、二酸化炭素を吸収して地球温暖化の防止に貢献するという公益・多面的な機能がある。その森林づくりのために、今日も和歌山の青空の下、ドローンが資材を運ぶ。その向こうには新しい林業の形があった。

❶全幅約1メートル。1年の開発期間を経て完成したドローン〝いたきそ〟。人間が15kg程度の資材を担ぎ運ぶと往復で2時間近くかかるが、ドローンならわずか3〜4分で行うことができる。❷木々が生い茂る林の中でドローンを飛ばすと距離感が失われ、作業の安全性を損なうおそれがある。そのため荷出側と荷受側のそれぞれにドローン操縦者を配置し、途中で操縦者を切り替え目視で操縦し、作業の安全性を確保している。補助者は周囲の安全確認と貨物のつけ外しを担当し、1年間のOJTを経てドローン操縦者になれるという。写真右が創業者の中川さん。社員の笑顔に風通しのいい社風が見て取れる。

新しい林業は、山を育てながら、人も育てる。

❸地元小中学校の生徒を対象に、林業がもつ社会的な役割などを体験するイベントも開催。また災害時の救援物資の運搬を無償で行う災害救援協定を田辺市と結ぶなど、地域貢献にも積極的に関わっている。❹育苗事業を展開。山主さんに理解を求め、スギやヒノキだけでなく、山頂にウバメガシなどの広葉樹を植え、山の動物と人間が共存する世界を作ろうとしている。❺山の緑を育てながら、そこに関わる人間も成長する。伐採された斜面に苗木を植え、数十年かけて山は成長していく。

株式会社中川
住所／田辺市文里2丁目32-7
電話／0739-33-9850